

# 第2章ーI

## 育ちや学びのつながりを意識した実践 ～えがおわくわく期のカリキュラム～

### 年長アプローチカリキュラム期

#### ～ 目 次 ～

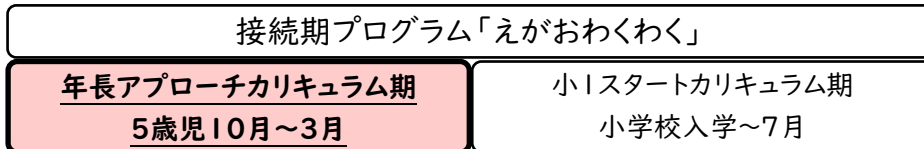
<b>I 年長アプローチカリキュラム期</b>	
(1) アプローチカリキュラムとは	18
(2) アプローチカリキュラムの効果	18
(3) アプローチカリキュラム作成・実施のポイント	18
(4) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)	19
◇ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)と小学校へのつながり	20
(5) 資質・能力を育む「学びの過程」を意識した実践	22
(6) 年長アプローチカリキュラム期の実践例	24
◇ 実践例を読むにあたって	24
◇ 実践例①：「すごいぞ!何でもできるぞ!ダンボール」	28
学びの育ちを確認するために～実践例①を通して見られた子どもの姿を 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連で可視化すると～	32
◇ 実践例②：「友達と一緒にだから、やってみたい!」	34
◇ 実践例③：「明日はもっと怖くしよう」	38

# 1 年長アプローチカリキュラム期

## (1) アプローチカリキュラムとは

### ➤ 幼児教育と小学校教育が円滑に接続するためのカリキュラムです

- ・ 小学校との接続の手掛かりとして示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を意識した幼児教育の充実を図ります。



## (2) アプローチカリキュラムの効果

- 幼児教育と小学校教育で育まれる資質・能力の一貫性を確保することができます
- 小学校教育を見通しながら遊びや体験を豊かにしていくことで、小学校以降の安定した生活や学習の基盤が育まれます

## (3) アプローチカリキュラム作成・実施のポイント

- アプローチカリキュラムでは、小学校での生活や学習を見通し、育ちや学びの連続性が見えるように作成します
  - ・ 発達段階を踏まえ、遊びや環境を通して、子どもがどのような体験をし、その過程において何が育ってほしいのかが、分かりやすく示されていることが大切です。
  - ・ アプローチカリキュラムは、5歳児担当の先生だけでなく、園全体のこととして、園長や教頭・主任をはじめ、これまでの育ちに関わってきた保育者などを含めたチームで作ることで、より良いものになります。

「幼稚園教育要領解説」第1章総説第3節5「小学校教育との接続に当たっての留意事項」より抜粋  
幼児は、幼稚園から小学校に移行していく中で、突然違った存在になるわけではない。発達や学びは連続しており、幼稚園から小学校への移行を円滑にする必要がある。しかし、それは、小学校教育の先取りをすることではなく、就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことが最も肝心なことである。つまり、幼児が遊び、生活が充実し、発展することを援助していくことである。

### 【解説】

同様のことは、保育所保育指針解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説にも書かれています。

例えば、アプローチカリキュラムで「小学校への期待感をもつ」ことを計画する場合、ランドセルをその時期の環境として配置構成すると、学校ごっこが展開されることがあります。小学校へ行くことは楽しみである一方で自覚のない不安などもあるかもしれません。みんながいる集団での学びが展開される中で、ワクワクドキドキを経験するこの時期にふさわしい遊びの一つと言えるでしょう。

【坂田先生より】



### ➤ 子どもの姿を見取り、柔軟に実施することが大切です

- ・ 日々、子どもが何に興味・関心をもっているかに着目し、子どもがすることを保育者が認め、受け入れることが大切です。計画した内容に固執せずに、子どもの興味・関心の姿から、柔軟に計画を変更し、ねらいを立て直し、環境を再構成するなど、子どもの姿から軌道修正することで、主体的・対話的で深い学びにつながります。

#### (4) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、乳幼児期にふさわしい生活や遊びを積み重ねることにより(5領域のねらいや内容に基づく活動全体を通して)、資質・能力が育まれている子どもの小学校就学時の具体的な姿を示しており、保育者が一人一人の発達に必要な体験が得られるような環境を作ったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮するものです。

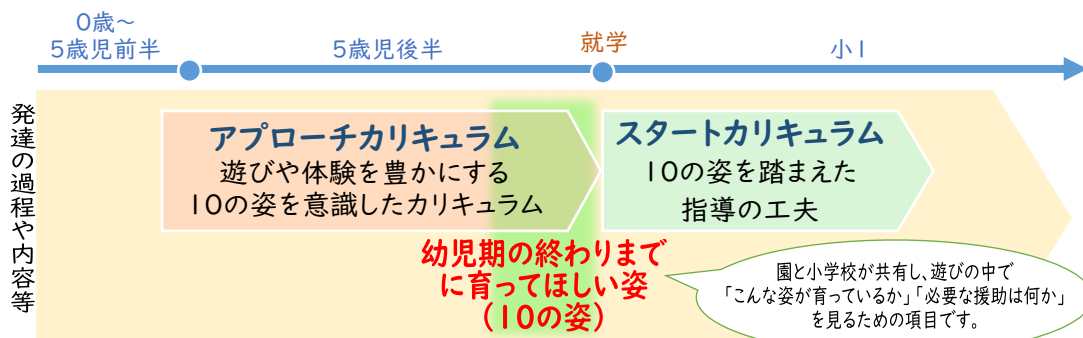
##### 5領域と10の姿の関連性

(青字が5領域、緑字(ア~コ)が10の姿です。)

健康	ア. 健康な心と体
人間関係	イ. 自立心    ウ. 協同性    エ. 道徳・規範性の芽生え オ. 社会生活との関わり
環境	カ. 思考力の芽生え    キ. 自然との関わり・生命尊重 ク. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
言葉	ケ. 言葉による伝え合い
表現	コ. 豊かな感性と表現

#### 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解する 重点ポイント

- ! 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は到達目標ではありません。
- ! 個別に取り出して指導するものではありません。
- ! 5領域による保育・教育の中で、子どもの自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて育っていくものです。
- ! 卒園を迎える年度の子どもたちに突然みられるようになるものではないため、卒園を迎える年度の子どもだけでなく、その前の時期から、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことが大切です。
- ! 幼児教育で培われた資質・能力を小学校教育に生かすことができるように、保育者と教師が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに話し合い、共有することが大切です。



## ◇ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)と

### ア. 健康な心と体

園の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

#### ●小学校では

小学校生活において、時間割を含めた生活の流れが分かるようになると、次の活動を考えて準備をしたりするなどの見通しをもって行動したり、安全に気を付けて登下校しようとしたりするようになる。また、自ら体を動かして遊ぶ楽しさは、小学校の学習における運動遊びや、休み時間などに他の子どもと一緒に楽しく過ごすことにつながり、様々な活動を十分に楽しんだ経験は、小学校生活の様々な場面において伸び伸びと行動する力を育てていく。

### イ. 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

#### ●小学校では

小学校生活において、自分でできることは自分でしようと積極的に取り組む姿や、生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む姿、自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは、教師や友達に聞きながら粘り強く取り組んだりする姿など、日々の生活が楽しく充実することにつながっていく。

### ウ. 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

#### ●小学校では

小学校における学級での集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んだりするなど、教師や友達と協力して生活したり学び合ったりする姿が見られるようになっていく。

### エ. 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

#### ●小学校では

小学校生活において、初めて出会う人の中で、幼児期の経験を土台にして、相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりなどしながら、気持ちや行動を自律的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする姿が見られるようになっていく。

### オ. 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

#### ●小学校では

小学校生活において、相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しんだり、関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れたりするようになる。また、地域の行事や様々な文化に触れることを楽しんで興味や関心を深めることは、地域への親しみや地域の中での学びの場を広げていくようになっていく。

## 小学校へのつながり（保育所保育指針解説を参考に作成）

### カ. 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

#### ●小学校では

小学校生活で出会う新しい環境や教科等の学習に興味や関心をもって主体的に関わることにつながる。また、探究心をもって考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決する態度へとつながっていく。

### キ. 自然との関わり・ 生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる。

#### ●小学校では

小学校の生活や学習において、自然の事物や現象について関心をもち、その理解を確かなものにしていく基盤となる。さらに、実感を伴って生命の大切さを知ることは、生命あるものを大切に、生きることの素晴らしさについて考えを深めることにつながる。

### ク. 数量や図形、標識や 文字などへの 関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

#### ●小学校では

小学校の学習に関心をもって取り組み、実感を伴った理解につながるとともに、学んだことを日常生活の中で活用するようになっていく。

### ケ. 言葉による伝え合い

保育者等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

#### ●小学校では

小学校の生活や学習において、学級の友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりしながら一緒に活動する姿や、自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする姿が見られるようになっていく。特に、戸惑いが多い入学時に自分の思いや考えを言葉に表せることは、初めて出会う教師や友達と新たな人間関係を築く上でも大きな助けとなる。

### コ. 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

#### ●小学校では

小学校の学習においても感性を働かせ、表現することを楽しむようになる。これらは、音楽や造形、身体等による表現の基礎となるだけでなく、自分の気持ちや考えを一番適切に表現する方法を選ぶなど、小学校以降の学習全般の素地になる。また、臆することなく自信をもって表現することは、教科等の学習だけではなく、小学校生活を意欲的に進める基盤ともなっていく。

## (5) 資質・能力を育む「学びの過程」を意識した実践

資質・能力を育むためには、小学校教育においても幼児教育においても学びの過程を意識して実践することが重要です。

<p style="text-align: center;"><b>幼児教育における 資質・能力を育む学びの過程の考え方</b>  <small>幼児教育部会における審議の取りまとめ          (中央教育審議会 幼児教育部会2016.8.26)より</small></p> <p>幼児教育において、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である。(中略)幼児教育においても、資質・能力を育む上で学びの過程を意識した指導が重要である。</p>	<p style="text-align: center;"><b>小学校教育における 主体的・対話的で深い学びの実現</b>  <small>幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の          学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)          補足資料(中央審議会2016年12月21日)より</small></p> <p>「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにする。</p>
---	---

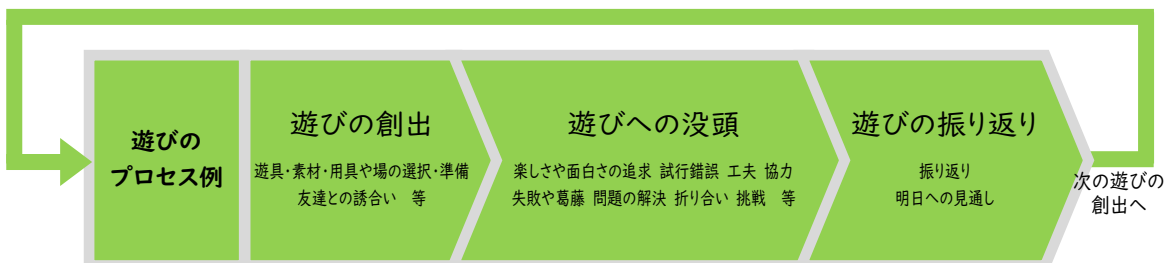
そこで、えがおわくわく第8版では、「幼児教育部会における審議の取りまとめ」で示されたイメージ図(次ページ)を参考にして、「遊び」と「単元」の学びを捉えた実践例を作成することにしました。

### <実践にあたっての考え方>

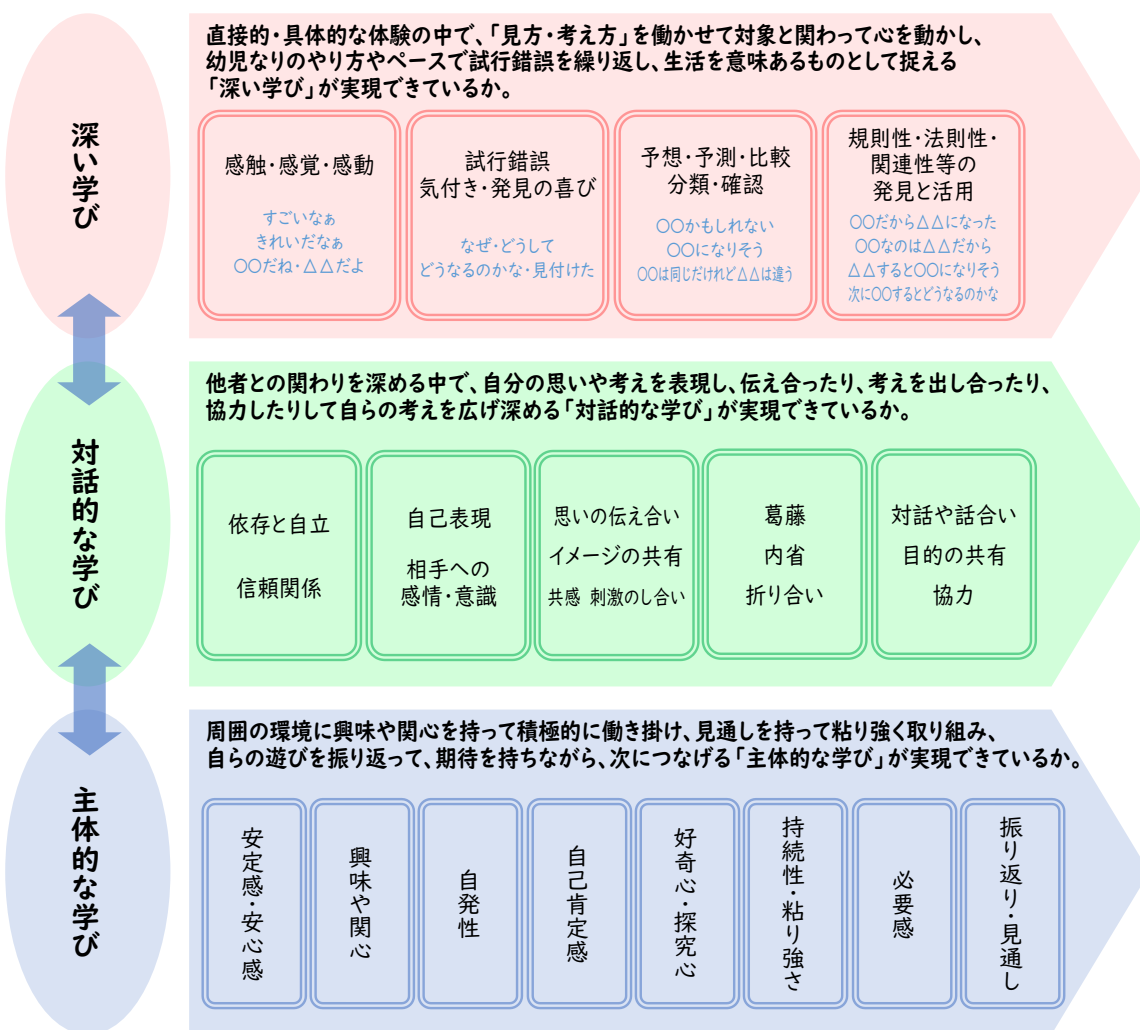
<p style="text-align: center;"><small>幼児教育部会における審議の取りまとめ          (中央教育審議会 幼児教育部会2016.8.26)より</small></p> <p style="text-align: center;"><b>幼児教育における 資質・能力を育む学びの過程の考え方</b></p> <p>○幼児教育における学びの過程は、発達の段階によって異なり、一律に示されるものではないが、一例を示すとすれば、5歳児の後半では、遊具・素材・用具や場の選択等から遊びが創出され、やがて楽しさや面白さの追求、試行錯誤等を行う中で、遊びへ没頭し、遊びが終わる段階でそれまでの遊びを振り返るといった過程をたどる。(次ページ参照)</p> <p>○前述のような学びの過程が実現するには、教員は、幼児教育において育みたい資質・能力を念頭に置いて環境を構成し、このような学びの過程の中で、一人一人の違いにも着目しながら、総合的に指導していくことが前提となる。</p>	<p style="text-align: center;"><small>小学校学習指導要領(平成29年告示)解説          総則編より</small></p> <p style="text-align: center;"><b>小学校教育における 資質・能力を育む学びの過程の考え方</b></p> <p>○単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。</p> <p>○児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視する。</p>
<p style="text-align: center;"><b>幼児教育における「見方・考え方」</b></p> <p>○幼児教育における「見方・考え方」は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることである。</p> <p>○また、このような「見方・考え方」は、遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友達と関わり、様々な体験をすることを通して広がったり、深まったりして、修正・変化し発展していくものである。こういった「見方・考え方」が幼稚園等における学びにつながるものである。</p> <p>○このような様々な体験等を通して培われた「見方・考え方」は、<u>小学校以降において、各教科等の「見方・考え方」の基礎になるとともに、これらを統合化することの基礎ともなるものである。</u></p>	<p style="text-align: center;"><b>小学校教育における「見方・考え方」</b></p> <p>○主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。</p> <p>○各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。</p>

# アクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた、 幼児教育における学びの過程（5歳児後半の時期）のイメージ

幼児教育において、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習として位置付けられている。  
下に示すプロセスは例示であり、順序を含め本例に限定されるものではない。



幼児教育における重要な学習としての遊びは、様々な形態等で構成されており、下に示す三つの学びの過程を相互に関連させながら、  
学びの広がり（深い学び、対話的な学び、主体的な学び）を意識した、指導計画の工夫が望まれる



## 環境を通して行う教育

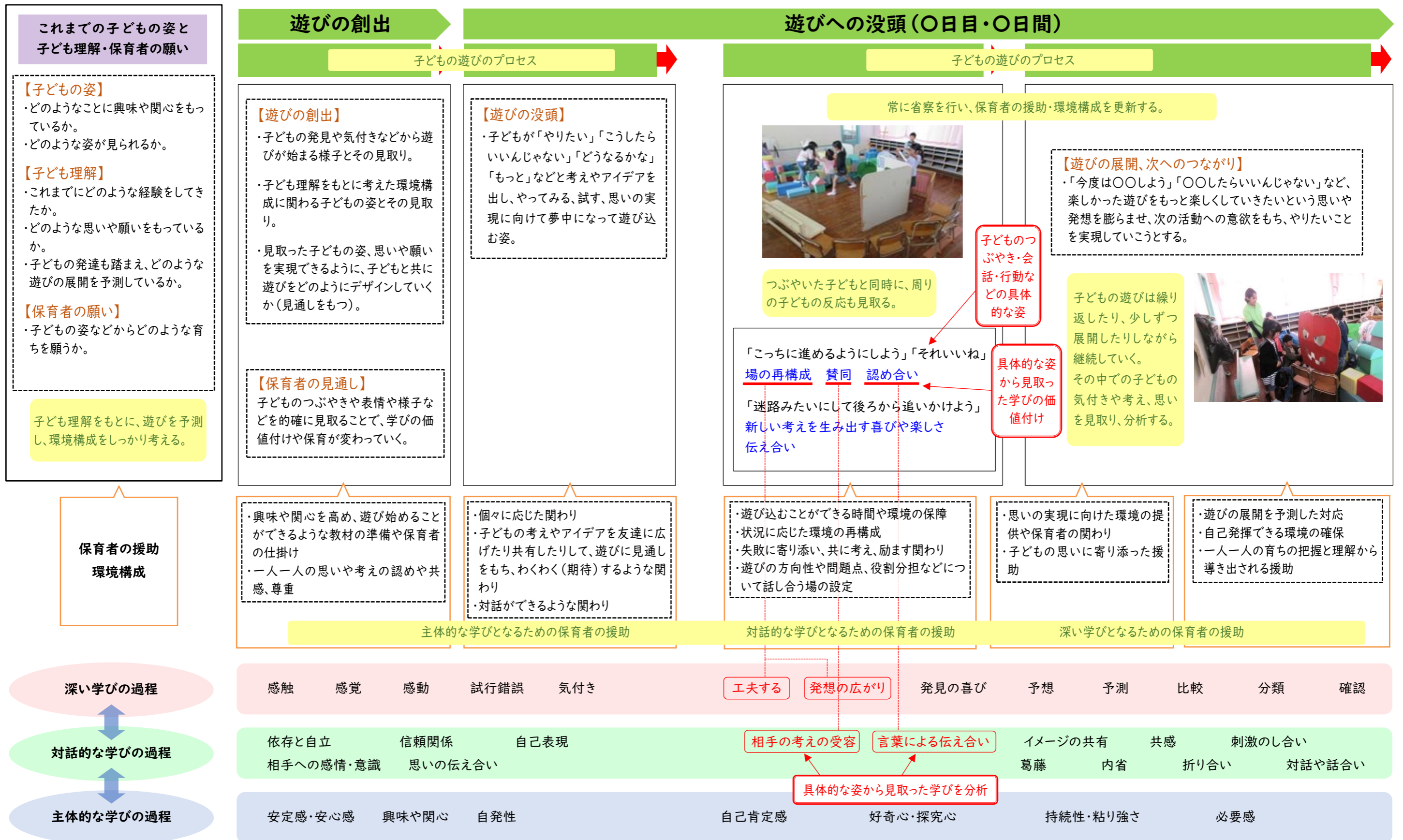
幼児一人一人の行動の理解と予測に  
基づいた意図的・計画的な環境の構成

幼児期にふさわしい生活の展開  
遊びを通じた総合的な指導  
一人一人の特性に応じた指導

(6) 年長アプローチカリキュラム期の実践例

◇ 実践例を読むにあたって(年長アプローチカリキュラム期)

5歳児 〇月 「〇〇〇〇〇〇」 ねらい:〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇



深い学びの過程	感触	感覚	感動	試行錯誤	気づき	工夫する	発想の広がり	発見の喜び	予想	予測	比較	分類	確認
対話的な学びの過程	依存と自立 相手への感情・意識	信頼関係 思いの伝え合い	自己表現	相手の考えの受容	言葉による伝え合い	イメージの共有 葛藤	共感 内省	刺激のし合い 折り合い	対話や話し合い				
主体的な学びの過程	安定感・安心感	興味や関心	自発性	自己肯定感	好奇心・探究心	持続性・粘り強さ	必要感						

深い学びの過程

対話的な学びの過程

主体的な学びの過程

具体的な姿から見取った学びを分析

5歳児 ○月 「○○○○○○」 ねらい:○○○○○○○○○○

## 振り返り

子どもの遊びのプロセス

### 【振り返りの例】

○子ども自身が振り返る

- ・楽しかったというだけでなく、どんなところが楽しかったのか、良かったこと、嬉しかったことは何かを具体的に振り返り、自分自身の成長を感じる。
- ・どうしたからうまくいったのか、今後どうしたいのかを振り返る中で、友達のよさに気づき、協同することや、やり遂げることの達成感や充実感を味わう。

### 【今後の活動につながるために】

- 子どもの振り返りを踏まえて、今後の活動につながるような保育者の関わり
- ・子どもの達成感や充実感に共感し、それを生かしてさらに楽しめるような活動について、子どもたちと話し合ったり、提案してみたりする。

- ・遊びの振り返り、話す場・聞く場の設定
- ・具体的な振り返りの視点の提示
- ・今後へのつながりに向けた関わり
- ・今後の活動に期待がもてるような関わり

主体的・対話的で深い学びとなるための保育者の援助

規則性・法則性・関連性等の発見と活用

目的の共有 協力

振り返り 見通し

## 【Q&A】(小学校の先生の疑問に答えます。)

Q. 各実践例や幼児教育に関する小学校の先生の疑問です。

A. 保育者が疑問に答えながら、それに関連した幼児教育のポイントや大切にしていることを伝えます。

## 【省察】

「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」について考察している箇所に下線を引くなどの方法で、学びの育ちを確認し、振り返る。

- :知識及び技能の基礎
- :思考力・判断力・表現力等の基礎
- :学びに向かう力・人間性等

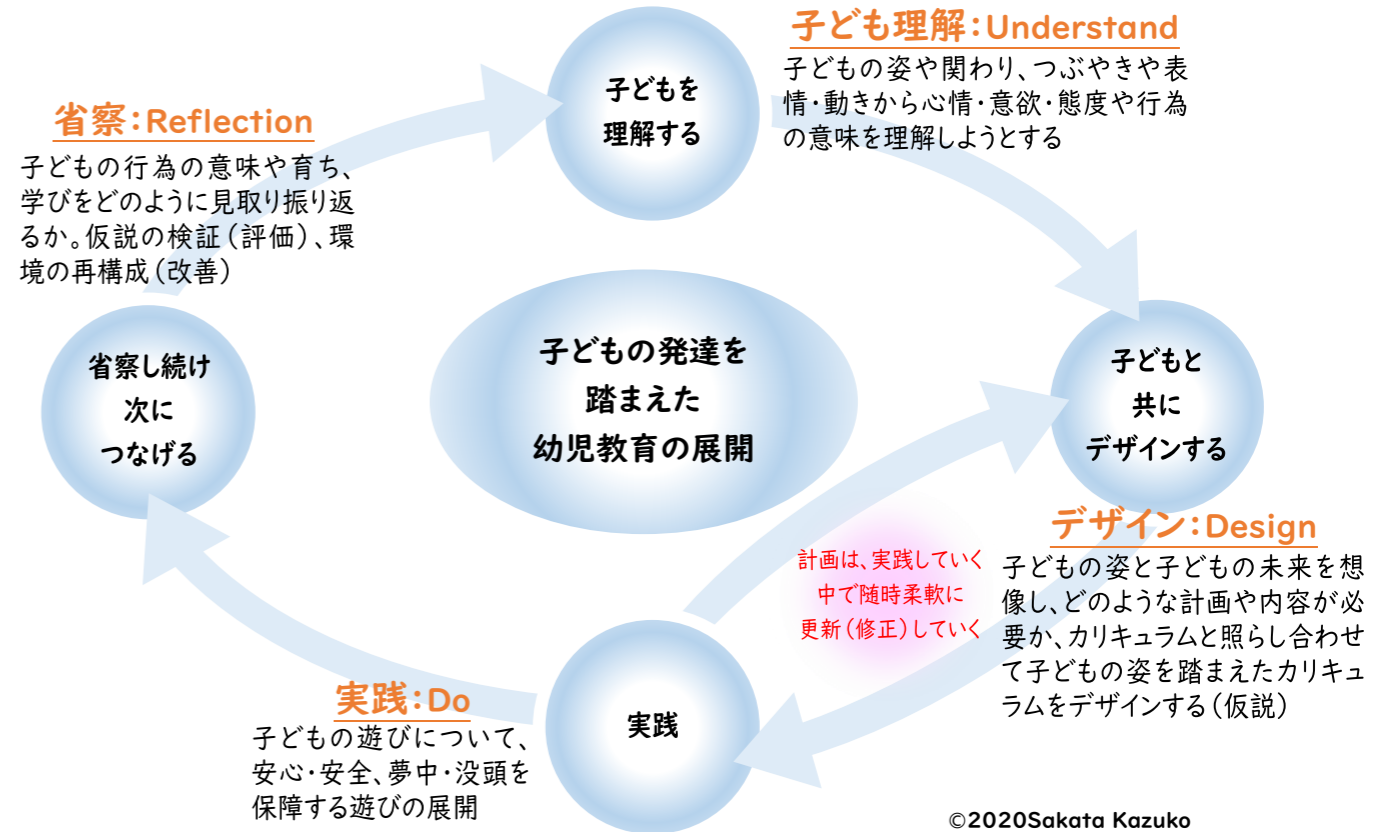
## 【保育者の振り返り】

- ・一人一人の特性を考慮し、思いや願いを大切にできたか。
- ・省察をし続けているか。
- ・常に適切な環境を考え、再構成をしたか。
- ・保育者の予測や計画を子どもの姿から柔軟に考え、子ども自身が意欲的に遊びを進めることができるようにしたか。
- ・一人一人の身に付いた力を見取ることで、自分が行った援助や環境構成はどうだったか。

## 【成果:幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)が見えてきているか】

- ・遊びの中で見えてきた子どもの育ちの姿を10の姿から見取る。
- ・実際の子どもの姿から育とうとしているものを把握する。
- ・次の遊びへの予測や計画、そこに向かう時の育つ力を見通す。

## 年長アプローチカリキュラム期で大切にしたいこと



### 【解説】

子どもが学びの主人公となる幼児教育(主体的な学び)を展開していくためには、保育者が専門性を発揮しながら、上図のように『子ども理解(Understand)ーデザイン(Design)ー実践(Do)ー省察(Reflection)』を循環させ、改善・充実していくことが有効です。子どもの心情からはじまる学びが、さらなる意欲や態度を育む乳幼児期の発達と学びの特性を踏まえると、子どもの姿を見取り、子どもを理解することが起点になります。

次ページ以降の年長アプローチカリキュラム期の実践例には、はじめに【子どもの姿】【子ども理解】【保育者の願い】が書かれています。子ども理解を基盤に、保育者の願いや子どもの未来に思いを馳せデザインされた計画は、子ども達の遊びの創出から没頭で変化していく、保育者が随時柔軟に計画を更新(修正)していくプロセスとして見る事ができます。『行為の中の省察』(D.シヨーン)と呼ばれる保育者の専門性が現れている場面です。

各園、保育の評価にあたっては、PDCA(Plan(計画)ーDo(実践)ーCheck(評価)ーAction(改善))のサイクルで進められていると思います。佐賀市では、『安心感を持ち、意欲的に学んでいる子ども』という接続期教育で育てたい子ども像を共有し、学ぶ前提には安心感が必要であること、安心して学ぶためには子どもの思いなどの心情を大切にしています。UDDRの見方ですらに子ども理解の深化を目指しましょう。

【坂田先生より】



## 小学校教育の基盤となるために

### 安心感をもてるように

夢中になれるためには、安心して自己発揮できることが大前提です。興味・関心のほかにも、子どもの状態や得手不得手、発達など一人一人を理解することが大切です。

### この時期にふさわしい育ちを大切に

やりたい気持ちと、発達段階、やれる環境が結びつくと、「考えたことを実現できる事は楽しい!」と感じる経験となり、自信につながります。

### 幼児教育は環境を通して行うもの

子どもが環境に主体的に関わり、興味・関心をもった事に夢中になることで、様々な学びの芽が育まれていきます。

◇ 実践例① (年長アプローチカリキュラム期)

5歳児 11月 「すごいぞ!何でもできるぞ!ダンボール」 ねらい:ダンボールや自然

物を使って、友だちとイメージを共有しながら工夫して作ることを楽しむ。

これまでの子どもの姿と  
子ども理解・保育者の願い

秋の園外保育や戸外への散歩を通して、秋の自然物(様々な色や形の落ち葉、どんぐり・松ぼっくりなどの木の实、小枝など)を集めて遊びに使うことを楽しんでいる。そこで、廃材を準備し、秋の自然物と一緒に様々な工夫をして遊びを楽しめるようにした。

廃材の中でも、ダンボールへの興味は高く、たくさんの落ち葉を集めるためにダンパーやブルドーザーとして使っていたが、次第に教材の主役はダンボールになってきた。

自然物や廃材の持つ可塑性※は子ども達の好奇心や探究心を引き出すため、この時期それらを使って、試したり工夫したりして遊ぶことを大切にしている。これまでの子どもの姿から、ダンボールを追加し、協同的な遊びに発展するように環境を再構成した。

※可塑性:自在な形が作りやすい性質のこと

保育者の援助  
環境構成

○活動の流れの見通し

話し合いで意見がうまく伝わるように、気持ちを確認したり、意見が出しやすい雰囲気を作ったりする。

○発想の実現に向けた教材提示

子どものイメージを聞きながら、ダンボールやガムテープなどを多めに準備する。

○子どもの発想への認めや関心

子ども達が、どんなことに気付きイメージをもっているのかを見守り、道や線路のイメージが広がるような言葉掛けをする。

遊びの創出(1~2日目)

運ぶ道具として利用 → ダンボールで道や線路を作ろう →

昨日から始まった広場での落ち葉の遊びを「明日もしようね」と話し合っていた。「おはよう!今日も、あの続きで、すすく広場(第2園庭)に行こうね!」

遊びへの意欲 仲間意識



「ピーピー、落ち葉を運ぶダンパーが通ります」

「危ないですよー!」

大量の落ち葉を一度にたくさん運ぶための工夫・協力



「ダンパーの道を作ろう」  
「切って、長くしたいから…ここ持って!」

遊びの発見 思いの実現 協力



「線路の線を書こう」  
「同じくらいの長さでね」

図形への関心・活用

遊びへの没頭(2日目)

いろんな乗り物ができた →

「僕は、ヘリコプターが作りたい」  
「プロペラは羽根4枚にしよう!」  
「それ、いいねえ」

仲間とイメージを共有



「プロペラつけよう」  
「何回もテープつけとこう」

アイデアを実現するための工夫



○子どもの気付き・発見への認めや共感

自分のイメージを形にしようと工夫する姿を見守り、気付きや発見に共感の言葉を掛ける。

○子どもの楽しさや探求の時間や場の確保

・前日に材料を十分準備しておく。  
・じっくり取り組めるように、時間や場を確保する。



「連結して、新幹線作るよ」 「ブルドーザーのキャタピラだ!」  
イメージを形にするための工夫 イメージしたものができた喜び

T「硬くて強いキャタピラができたね」

C「こっちの山だって登れるよ」

T「すごい!本物のブルドーザーみたいね」

C「降りるときの方がスピードが出て面白いよ」「もう1回しよう」

「もっと高いところから降りてみたいね」

T「この山をもっと高くできたらいいよね。どうしたらいいかな?」

C「そうだ!もっとダンボールちょうだい」「うん。ダンボールを上に乗せたらいいよね。僕も一緒に作る!」

友達のアイデアに触発されながら、楽しさや面白さの追求



○一人一人が自分のイメージを広げられるような援助・環境の再構成

子どもとの対話を通して素材や用具を補充し、個々のアイデアを大切にしながら、一緒に遊びを広げていく。

深い学びの過程

気付いたことを言葉に表す

図形の捉え

新しい考えを生み出す喜びや楽しさ

気付き 予測

対話的な学びの過程

思いや考えの伝え合い

目的やイメージの共有

協力

共感 刺激のし合い

伝え合い

主体的な学びの過程

意欲 期待感

自発性

発見を楽しむ 自己有用感 探求心

さらに面白いことへの意欲 期待感

遊びへの没頭(2日目)

坂道を滑ると楽しい!

「めっちゃ楽しい!超スピード」  
「次は、私に滑らせて」「いいよ!怖いかも」  
新たなアイデア・発想の広がり  
挑戦・友達への思いやり



○子どもの気づきを促す材料の準備

高い傾斜を作るのに適したものを自分達で気付けるように、様々な大きさや硬さのダンボールを準備する。

○一人一人の楽しさ・気づき等の把握と理解

その子らしい発想や工夫を大切にしながら、必要に応じてアイデアを出したり手伝ったりする。

ものの特性や変化の捉え

相手の考えの受容 折り合い

好奇心 探究心

達成感 充実感

遊びの振り返り(2日目)

修理・片付け

「ここ修理しよう!」「明日は、連結して滑りたい!」  
「雨が降ったらどうしよう」  
明日への期待・見通し



降園時、遊びの広がりや深まりを共有できるように、ドキュメンテーションにして掲示板に張り出した。子ども自身が活動を振り返ったり、保護者に子どもの育ちを伝えたりした。掲示板の周りでは友達や親子での会話が生まれた。



○次の遊びへの見通しや意欲への共感

明日に向けての子ども達と話し合い、準備するものなどを確認しながら意欲を高める。

○遊びの広がりや深まりを共有できるような工夫

活動の様子をドキュメンテーションにして張り出し、子ども自身も活動の振り返りができるようにする。

思いや考えの伝え合い

振り返り 次の遊びへの見通しや意欲

【Q&A】(小学校の先生の疑問に答えます)

Q. 時間を忘れて活動に取り組んでいる時の、片付けや食事などの次の活動への切り替えはどうしていますか?

A. 活動を始める前に子ども達と大まかなスケジュールを決め、ある程度の見通しをもって活動するようにしています。時間になっても活動が盛り上がっているときは、翌日に遊びの続きができることを伝え、子ども達が折り合いをつけながら次の活動への切り替えができるように工夫しています。

Q. 一人一人が主体的に活動するために大切にしていることは?

A. 安心感をもって園生活を送り、保育者や仲間からどんな意見も(行動も)受容される信頼関係を大切にしています。なるべく、保育者が否定語や指示語を使わず、一人一人が思い付いたアイデアを伸び伸びと言葉にできる雰囲気づくりを心掛けています。

【省察】

- : 知識及び技能の基礎
- : 思考力・判断力・表現力等の基礎
- : 学びに向かう力・人間性等

様々な廃材を使ってイメージ通りのものを作ることは、これまでも多く経験している。比較的、戸外で過ごしやすいこの時期に園庭に創作の場を設定したことで、予測していたよりダイナミックで継続的な活動となった。様々な大きさや硬さのダンボールを数多く準備したことで、作りたいもののアイデアが次々と出てきたり、作りたいものに適したものに気づき、選んで作ったりすることができた。

計画の段階では、落ち葉のプールや滑り台を作って遊ぶと予測していたが、道や線路を作り出したことで次第に乗り物のイメージが膨らみ、乗り物が好きなA児を中心にヘリコプターやブルドーザー、電車などを作る遊びに広がっていった。

A児を見て、B児も一緒になってヘリコプター作りが始まった。明らかに、A児達の活気溢れるヘリコプター作りに触発されブルドーザーや電車作りが生まれてきた。子ども同士、イメージを伝え合い助け合いながら、一緒に作り上げる喜びやできたもので一緒に遊ぶ楽しさを共有できたこと、お互いのよさを知り、一緒に遊ぶ楽しさを十分に味わえたと思う。

遊びの後半では、傾斜をつけたダンボールで作った乗り物などで滑ることを楽しみ、友達と話し合いながら工夫して遊んでいた。探求の時間や場の確保をしたことで、作っては遊び、遊んでは作ることを繰り返していた。いつもは遊びが長く続かないCちゃんが没頭し、試行錯誤する姿に、粘り強さの育ちが友達によって引き出されていることを感じた。

【実践例についてのコメント】

前日の遊びから、遊びへの期待感を持ち登園した子ども達。遊びの主役が落ち葉集めから可塑性に富んだダンボールへ移っていったことは自然の流れかもしれませんが、落ち葉を入れる容器としてのダンボール、長い道になるダンボール、ヘリコプター・新幹線・キャタピラ・ブルドーザーなど乗り物としてのダンボール。子ども達がダンボールの素材や特性を試しながら理解し創造していく姿は、保育者が見取り、大きさや硬さなどの異なる段ボールを追加し準備していくなどの応答的な環境構成(再構成)あつてのことです。子ども達の試行錯誤や工夫、長さの比較、発見のプロセス、関連性の発見など、年長アプローチカリキュラム期のアクティブラーニングがダイナミックに描かれています。

そして、遊びの広がりや深まりを共有するためにドキュメンテーションで学びを可視化しており、学びの振り返りや明日の遊びの見通しなどがわかりやすく子ども達の意欲が高まります。保護者と子どもの育ちを喜び合うツールとしてのドキュメンテーションに留まらず、子どもたちが遊びや生活を通じて、「どのように育っているのか」、「何を学んでいるのか」という学びの育ちを伝え、家庭で子どもと保護者をつなぎ、家庭と園が見通しをもちながら生活を重ねることは安心のみならず安定へ繋がるでしょう。

【坂田先生より】



# 学びの育ちを確認するために

実践例を通して見られた子どもの姿を  
 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)との関連で可視化すると

学びの育ちを確認するために、実践例①から見えてくる子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を基に整理してみました。

一つの活動からいろいろな育ちの姿が見えてきます。(必ずしも一つの活動から10の姿のすべてが見えてくるわけではありません。)その時の姿が、次の活動につながったり広がったり発展していくことも多くあります。また、見えてきた育ちの姿から何が獲得できたかを把握することで、子ども一人一人の育ちを次の遊びにつないでいくことができます。



【解説】

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは、『幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることによって、幼児教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿』です。育ってほしい『姿』が、育ってほしい能力となっていないところがポイントです。能力であれば到達目標がありますが、10の姿は、この姿が幼児期の終わりまでに育ってほしいという発達の道筋のようなものです。この姿は突然見られるようになるものではなく、それぞれの時期にふさわしい育ちを積み重ねて幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として現れます。そしてこの姿は、到達目標や個別に取り出されて指導されるものではないこと、全ての子どもに同じように見られるものではないことに留意する必要があります。

子どもの心が動き、それをしてみようと意欲が湧き、よりよくしていこうという態度が直線的に現れ育まれるというよりも、環境を通した遊びの中で、瞬間あるいは継続的に多様に立ち現れるような姿をイメージしてください。



【坂田先生より】

©tutumi

● 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

健康な心と体	園の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
数量や図形、標識や文字などへ関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い	保育者等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

◇ 実践例② (年長アプローチカリキュラム期)

5歳児 11月 「友達と一緒にだから、やってみたい!」 ねらい:友達と一緒に多様な遊び方を楽しんだり、自分の思いに向かって挑戦したりする

これまでの子どもの姿と  
子ども理解・保育者の願い

年少・年中の時に、遊びの中でたくさん体を動かし、色々な遊びを楽しんできた子ども達。縄遊びでは、蛇跳びや縄くぐり、綱渡り、長縄跳び等の経験を重ね、遊びながら縄に親しんできた。

年長になり、10月の運動会後から、縄跳びが遊びの中心に盛んになってきた。一方、苦手意識をもっている子もいて、意欲に差がある。

遊びの中で、縄跳びが跳べるようになるということではなく、友達の刺激を受け、やってみようという意欲をもったり、一人一人が自分の思いに向かって挑戦したりしてほしいと考える。また、遊び方を考え工夫し、友達と一緒に多様な動きを楽しめるようにしたい。

保育者の援助  
環境構成

遊びの創出(1~2日目)

友達・縄跳びへの関心

ある日の帰りの会で、クラスで1日の振り返りをしている中、子どもから縄遊びの話題が出た。縄跳びをたくさん跳んでいた友達に気付いた子が、その様子を皆に伝えると、自然と拍手をする子どもの姿が見られた。

友達のよさの気付き・受容 温かい心もち  
縄跳びへの興味・関心・意欲



(翌日)

「わたしもする!」「いれて!」「いいよ」  
今まであまり興味を示さなかった子や、苦手意識のある子も、友達が跳ぶ様子を見たり、やってみたりする姿が見られ始めた。

興味・関心  
一緒に遊びたい気持ち  
意欲



コツを教える

縄跳びに挑戦するがうまく跳べずに困っている友達に気づき、「縄を回して、下にきたら跳ぶんだよ!」と分かりやすいようにコツを教える。

友達の姿(思い)への気付き 思いやり

「やったー! 跳べた!」  
「やったね! 跳べたね!」と友達が拍手する。

跳べた喜び 自信 喜びに共感 思いやり

この後、自分で何度も挑戦している。

きっとできると予測 挑戦



遊びへの没頭(2~10日間)

長縄・みんなで跳ぼう

「私、長縄がいい!」と年中の時に遊んだ「郵便屋さん」「蛇跳び」など、自分が跳べる遊びを楽しむ。  
跳びたい気持ち  
跳べる楽しさ  
自信



「みんなで一緒に跳ぼう」「引っかかった人は座ってね」 みんなで遊ぶ楽しさ ルールの共有

「やったー。勝った!」「間違えたから、もう1回!」「僕だって本当はもっと跳べるよ」「じゃあ、しよう!」 悔しさ 勝ちたい気持ち 自信



○遊びの環境の設定

子ども達が楽しんで遊べるものを運動場に準備しておく、それを自由に使って遊べる環境を整える。

○子どもの遊びの見守り、思いの受け止め・共感

ルールを伝え合い、遊びを進める様子を見守り、それぞれの思いを受け止めたり、皆で遊ぶ楽しさに共感したりする。

一緒に跳んでみよう

「そうだ!先生、2人跳びしよう」  
「わー! 跳べた!」

発想 跳べた喜び

「いいな、私もしたい!」「じゃあ、3人で跳んでみようよ」

少し難しいことへの挑戦

「3人って難しいね」「もっとくっついたらいいんじゃない?」

跳び方の工夫 諦めずに頑張る気持ち



T:「何回跳べたかな?」

「数えてあげようか?」「いち、に、さん...」今まで縄跳びに参加していなかったA児が数えてくれる姿があった。

興味 数えることでの参加 優しさ



「私たちが跳んでみよう!」

発想 挑戦 友達同士と一緒に跳ぶ喜び

「先生!5回も跳べたよ!」

数、どれだけ跳べたかへの関心

A児が自ら縄を持つ

跳びたいでも不安な気持ち 葛藤



○遊びへの参加・思いの共感

保育者も遊びに加わり、楽しさを共有すると共に、周りの子に楽しんでいることを姿で伝えていく。

○それぞれの個性の把握・認め

それぞれの個性を感じながらよさを認めていく。

○遊びの展開や挑戦に向けた関わり

遊びが広がったり自分の思いに向けて挑戦できるような関わりや言葉掛けをする。

深い学びの過程

対話的な学びの過程

主体的な学びの過程

楽しさや面白さの発見

新しい遊びの発見  
試行錯誤

発想の広がり  
工夫

期待感  
気付き

楽しさ面白さの追求  
跳び方の工夫 数量への関心

話し合い  
思いや考えの伝え合い

目的の共有

協力

対話

行動と言葉での伝え合い

ルールの共有

喜び

葛藤

アイデアの伝え合い

興味・関心

自発性

真似る

意欲の芽生え

ルールを意識して取り組む

楽しさの共有

挑戦する意欲

認められる喜び

自信

次への挑戦

諦めないで取り組む

遊びへの没頭

遊びの振り返り(10日目)

遊び方の発見・跳びたい

縄への気づき

遊びの紹介



「ねえ、こうやって跳んでみようよ!」「跳べた!」「あたたしたちすごいよね」「うん。すごいよね!」  
発想の広がり 成功した喜び 喜びの共有 自信

引っかかっても繰り返し挑戦する子が増えてきた。なかなか跳べずにやめてしまっても、また次の日に再度挑戦する姿が増えた。

跳べるようになりたい気持ち 意欲 粘り強さ 諦めない気持ち

「この縄だったらたくさん跳べる!」「これはあんまり跳べない」「ビニールの方が回しやすいよ」  
繰り返し遊ぶうちに、縄の違いで跳びやすさがあることに気付く。

素材による跳びやすさの気づき



「やってみたい。貸して!」「その次、僕もさせて」  
試したい気持ち たくさん跳べる予測と期待



「みんなに跳びやすい縄のことお知らせしたい!」  
発見の喜び 友達に伝えたい気持ち

T:「今日ね、縄跳びの大発見をしたお友達が、みんなにお知らせしたいって」

「こっちの縄より、ビニールの縄跳びの方が回しやすくて、たくさん跳べるよ」

「僕がやってみたら、本当にたくさん跳べたんだよ。」  
「なら、私も明日やってみたい!」

やってみたことを伝えたい気持ち 明日への意欲 たくさん跳べることへの期待

T:「ほかにも発見やお知らせしたいことあったかな?」

「2人跳びできたよ」「私たちは手をつないで跳べたんだよ」「どうやって?」「こうだよ」

遊びの振り返り 自信 満足感 言葉や動作で自分なりに伝える 遊びへの興味関心 意欲



○子どもの姿の見守り

できた喜びを子どもと一緒に分かち合う。また、子どもの挑戦する姿を見逃さずに、その子なりの頑張りを認めることで自信へとつなげる。

○環境の設定

跳びやすさを試せるように素材や長さの違う縄をさりげなく置いておく。

○遊びをみんなで振り返る時間を設ける

様々な遊び方をしている様子や縄の違いに気付いたこと等、友達の話や聞くことで、興味をもったり、遊びの工夫・発展につながるきっかけとなったりするように配慮する。

クラスで紹介し合う時間を設けることで、友達のよさへの気づきを認め合い、一緒に高まり合えるようにする。

【Q&A】(小学校の先生の疑問に答えます)

Q:小学校では、苦手意識から活動に興味を示さない子どもの姿があります。園ではどのように関わっていますか?

A:子どもは、小さいころに安心して過ごせる環境があることが、心身の安定につながります。特に0~2歳の時は、保育者が子どもの思いや甘えを十分に受け止め、やりたいことを思い切りやれるような関わりを心掛けています。この経験がその後の「やりたい」「面白い」という意欲を引き出す原動力になっていきます。また、失敗したり間違ったりしてもとがめられないという安心感をもつことができるような関わりも心掛けています。「誰が一番上手かな?」よりも、人と比べられることなくやりたいことを十分に組み立てるような配慮も大切です。そして、道具や遊具、保育者や友達との関わり方など、一人一人の姿に応じた環境を整えていくようにしています。

Q:子どもにどのように関わったら、やる気が持続しますか?

A:子どもに持続して何かに取り組ませようとするのではなく、子どもが自ら夢中になって遊び、遊びに没頭していきることが大切です。そのためにも、好きな遊びを見つけられるような環境を準備したり、十分遊び込める時間を保障したりすることが、持続する姿につながっていくと思います。

【省察】

- :知識及び技能の基礎
- :思考力・判断力・表現力等の基礎
- :学びに向かう力・人間性等

クラスの仲間意識が強くなっていくこの時期。友達の様子に興味をもち、友達のよさに気付いたり、それを伝え合い一緒に遊ぶ姿が見られたりしたことは、「友達っていいな」と感じる子ども達の成長を感じる。縄跳び遊びでは、年少・年中と遊んできた経験も糧としながら、友達の遊びの輪の中に自然と入って一緒に遊ぶ楽しさを感じたり、友達がしているのを見て自分もやってみようと思ったりする姿にもつながっていった。また、上手く跳べずに困っている友達の悔しい気持ちを感じたり、できるようになったことを一緒に喜んだりなど、多様な気持ちへの共感性や思いやりが育まれていった。

縄跳び遊びがブームになり、多くの子どもが楽しんだり挑戦したりする中で、様々な素材の縄を準備したり、遊びが広がるようにさりげなく仕掛けをしたりすることで、子どもの気づきや発想が生まれ、多様な跳び方を楽しんだり跳びやすいものを探求したりする姿になっていた。

「跳べないからつまらない」「したくない」という子どもの姿もあったが、その思いに寄り添いながらも、「(本当は)跳べるようになってみんなと一緒に遊びたい」という気持ちがあることも読み取り、心の動きを見守るようにした。中にはちょっとしたきっかけで心が動き、自分なりに縄跳び遊びを楽しんだり、葛藤を乗り越え挑戦したりすることができると、自信が付き、自分なりの目標が生まれ、傍で一緒に遊ぶ友達がいて、諦めずに粘り強く頑張る気持ちがもてるようになっていく姿も見られた。

今回、縄跳び遊びをしなかった子どももいたが、違う場面でその子のよさを知らせる機会を作り、お互いに刺激を受けながら自己肯定感を高め、自信をもって様々な活動に取り組めるようになっていきたい。

【実践例についてのコメント】

年少、年中からの遊びで育まれてきた学びの積み重ねと、その姿として出ている年長児クラスでの1日の振り返りの縄遊びの話題。縄跳びをたくさん跳んでいた友達に気付いた子が、その様子を皆に伝えたくて、そのことを知った他の子どもたちが自然と拍手をしたくなった子どもの姿から先生が見取った子どもたちの心情。そして、「跳べないからつまらない」「したくない」という子どもの言葉に、「(本当は)跳べるようになってみんなと一緒に遊びたい」という気持ちがあることを見取っている先生の子も理解から始まる実践が大変豊かに展開されています。

遊びに没頭した子どもが、遊び方の発見をしたときの言葉、「あたたしたちすごいよね」「うん。すごいよね!」に子ども自身への期待が込められています。

目の前の子ども達は、私たちが生きている世界に生まれてきてまだ5~6年、歩き出して4~5年しか経っていません。その中には出産予定日より早く・遅く産まれてきた子どもなど様々な違いがあります。日々の積み重ねでわかること、たくさんの『できる』が増えた子ども達は有能感に満ちています。縄跳びの縄の素材の違いを発見した子ども、その他の子どもにも発見やお知らせを確認している振り返りの時間は、子どもが肯定されていることを自覚する大切な時間になっています。そして縄跳びで自己発揮する子どもがいれば、その他で発揮する子どもがいるという、一人一人のよさを大切にされる保育は自己肯定感を育むことにつながると言えるでしょう。

【坂田先生より】



遊びの発展・工夫 予測

様々な発見や気づき 素材への関心 比較

試行錯誤

思いや気持ちの芽生え

イメージの共有 喜びの共有

考えや思いの伝え合い 遊びの振り返り

自主的な遊び 自信 興味の芽生え 挑戦 粘り強さ

遊びを繰り返す

充実感 満足感 次への期待・意欲

◇ 実践例③ (年長アプローチカリキュラム期)

5歳児 11月 「明日はもっと怖くしよう」 ねらい:遊びを通して友達とイメージを

共有し、考えを出し合いながら遊びを進めようとする

これまでの子どもの姿と  
子ども理解・保育者の願い

1学期末にあった夏祭りでは、かき氷やヨーヨー、くじ引きなど保護者による縁日遊びをお客さんとして楽しんだ。

夏祭りの後、「お母さんがかき氷つくってくれたね」「焼きそばも食べたよ」など、楽しかったことを子ども同士で嬉しそうに話していた。これをきっかけに、かき氷や焼きそばを様々な素材を使って製作したり、年下児を招いて出店屋さんごっこを再現したりして楽しんできた。

2学期になって、これまで遊んできたことを生かし、折り紙屋さんや塗り絵屋さんなど、自分の好きなことや得意なお店屋さんにして友達と一緒に遊ぶ姿がよく見られている。

そこで、やりたい遊びに友達と一緒に取り組む中で、イメージを共有し、考えを出し合いながら遊びを進め、協同的な遊びに発展していけるようにしたい。

保育者の援助  
環境構成

遊びの創出(1日目)

暗がりから広がる遊び

ホールの隅にできた暗がりへ隠れ、驚かすこと楽しんでいたA児とB児。そこに夏祭りで製作したのっぺらぼうのようなお面を持ってきたC児。「怖〜い、おばけみたい」と他児ら。「じゃあ、ここおばけやしきにするっていうのはどう?」「いいね」と遊びが始まる。

想像を膨らます楽しさ イメージの共有

それぞれのもつイメージでおばけになって遊ぶ



「おばけだぞ〜」  
「きゃあ〜逃げろ〜」  
人との関わり 相手を驚かすことを楽しむ面白さ  
「何してるの?」「楽しそう、入れて」

「毒グモを背中に背負うようにしたいな」「おどかしてみよう」工夫 表現  
「きゃあ〜面白い。全然怖くない!」  
「あれっ!?どうしてかな」  
予想外の反応へ疑問

どうしたらもっとこわいおばけやしきになるか話し合う

「どうしたら怖くなるかな」「明日はもっと怖くしよう」と同じ目的をもつ。  
困りの共有  
「顔見えなくしたら」「暗くしたら」  
「いっぱい来てくれるようにチケット作ったらどう?」「それ面白そう」  
疑問解決に向けて思いや考えの伝え合い より怖くするための方法の模索  
想像性

○思いを受け止め、楽しさを共有  
イメージやアイデアを出し合いながら遊べるように、それぞれの思いを受け止めたり、一緒にやり方を考えたりする。

○思いを伝え合える場づくり  
「もっと怖いおばけやしきにしたい」という思いをクラスの友達に伝え、話し合う場を設けることで、友達と一緒に同じ目的に向かって遊びを進められるようにする。

遊びへの没頭(2~4日目)

目的を共有し、友達と場の再構成をする



「私達は入口でチケット渡すね」「みんなに分かるように看板作って置こう」  
「1、2、3...13枚あるよ」  
自分の思いや考えの伝え合い 目的の共有  
数や看板への関心

「こっちに進めるようにしよう」「それいいね」  
場の再構成 賛同 認め合い  
「迷路みたいにして、後ろから追いかけてみよう」  
新しい考えを生み出す喜びや楽しさ

「こんなの作ったよ!顔が見えないからきつと怖いと思うよ」「布ガムテープの方がよくつくつくよ」「まず穴を開けてからハサミで切ろう」「ボンド乾くまで触らないでね」  
試す 相手の反応を予測したやり方の工夫  
創造性  
様々な素材や用具の特性を踏まえた選択



○思いを表現できるような教材や時間、場の保障  
子ども自身で動かしたり、組み合わせたりできる素材や用具を用意する。  
子どもがイメージを形にしていく過程を楽しめるように、必要なものを環境に取り入れていく。

目的を共有しながら、



「怖いから行きたくない」と遊びに入らずに見ている子がいた。  
「おばけカボチャにお菓子をあげたら何もしないんじゃない」  
近くの材料でキャンディーを作り、おばけカボチャに渡す  
「ほらっ、何もなかった」  
「私もキャンディーつくりたい」「どうやって作ろうかな」「私は折り紙」「平テープでもつくれるよ」  
発想の広がり  
「私もお菓子あげる人になりたい」「じゃあ、つくる人いなくなるじゃない」「交代しよう」  
折り合い 受容 役割分担 協同性

○関わりを広げる提案、誘い掛け  
興味をもって見ている子どもも遊びに入れるような提案や誘い掛けをし、興味があることに関われるようにする。

深い学びの過程

対話的な学びの過程

主体的な学びの過程

疑問をもつ 理由や原因を考える

気づき 発想の広がり 予想 試行錯誤  
ものの特性の捉え 数への関心と活用

発見の喜び

目的の共有 思いの伝え合い 自己表現 共感

協力 協同 役割分担 言葉による伝え合い 思考力 イメージの共有  
折り合い 受容

興味・関心 真似る 試す 自発性

振り返り 遊びの継続 期待感 遊びの見通し 意欲 必要感

遊びへの没頭

遊びの振り返り

おばけやしきごっこを進める  
(→前ページより)



「次のお客さんが来た。せーので驚かそう」「いいね、面白そう!」

相手の考えの受容

「おばけカボチャだぞ〜ヒッヒ〜」  
「きゃあ〜おばけカボチャがしゃべった〜」

驚かす喜びの共有 満足感

「外から中が見えないようにしたらもっと来てくれるんじゃない?」  
「ガラスのところに紙を貼ろうよ」  
「貼り終わったらまたお客さん呼んでこよう」

新たな気付き 遊びへの意欲 思いの伝え合い

異年齢への遊びの広がり



「私も作りたい、どうやって作るの、教えて」と年下児の願いに「いいよ、教えてあげるね。一緒に作ろう」「こうやって動かすんだよ」

思いの受容 思いやり 分かりやすい伝え方

「今度は、チケット渡す人になりたい」「怖そうな音鳴らしたらどうか、ジャジャ〜ン(ピアノ低音)」

発想の広がり 様々な表現

「もも組(年少組)さんの時はあんまり怖くないおばけにしよう」

思いやり

「たくさん来てくれて良かったね」  
「喜んでくれて嬉しかった」

満足感

「本当に怖がってたね」

達成感

「今度は僕がおばけカボチャしたいな」小学生と日頃から交流があることから「小学生も呼ぼうよ」「その時はいちばん怖くしよう」「小学生だってすごく怖がる人もいるかもよ」「今日ぐらいがいいんじゃない?」「そうだね、みんな楽しそうだったもんね」

振り返り 怖さの度合いの調整 次への意欲

○思いや考えを引き出す関わり

それぞれの発想や思いを共感的に受け止めることで、思いや考えを出しやすい雰囲気をつくる。

○思いが伝わる喜びを感じられる関わり

年長児が工夫したところで年下児が楽しんでいたことを伝えることで、自分たちの工夫が楽しんでもらえた喜びを感じられるようにする。

○様々な表現に出会える関わり

それぞれの工夫を取り上げ、自分なりの発想でおばけやしきごっこを楽しめるようにする。

楽しさ面白さの追求

予測

発見の喜び

工夫に気付く

折り合い

葛藤

相手の考えの受容

憧れ

思いやり

自信

好奇心

充実感

達成感

年長児としての自覚

振り返り

次への遊びの見通し

【Q&A】(小学校の先生の疑問に答えます)

Q:子ども同士で思いがぶつかるなどの場面では、どのような関わりをされていますか。

A:思いを伝え合う姿を見守り、必要に応じて保育者が関わるようにしています。それぞれの思いに共感し受け止めたり、互いに相手の思いに気付くような言葉を掛けたりすることで、子ども同士が折り合いを付け、相手の思いを受け止める姿が見られるようになります。

Q:この遊びに興味をもたない子がいる場合、どうするのでしょうか。

A:まず、なぜ興味をもたないのか子どもの様子から見取ります。その実態に応じて、遊びへの誘い掛けや参加しやすいようなきっかけづくり(その子の好きなことや得意なことを遊びに取り入れる等)をし、やってみようかなという気持ちをもったり、協同的な遊びの楽しさに気付いたりできるようにしていきます。しかし、必ずしも皆が同じ遊びをしないとイケないというわけではありません。主体的に取り組み、じっくり遊び込む中で育まれる学びが大切であり、協同的な遊びの楽しさは他の遊びでも育むことができるものです。

【省察】

- :知識及び技能の基礎
- :思考力・判断力・表現力等の基礎
- :学びに向かう力・人間性等

年長児なりに工夫したおばけやしきだったが、「全然怖くない」という年下児の反応に「あれっ、どうして?」と疑問や残念な気持ちをもったことから遊びが発展した。「明日はもっと怖くしよう」と目的を共有したことで子どもの遊びがより協同的なものになっていった。子どもの思いに寄り添いながらも、子ども同士で思いや考えを出し合いながら遊びを進められるような保育者の関わりや、場の設定・時間の保障を心掛けたことで、自分では思い付かなかった友達の面白い発想に触れ、新たなアイデアがひらめいたり、力を合わせることでみんなを楽しませる遊びを進めたりする楽しさを味わうことができたように思う。

友達とアイデアを出し合いながらおばけやしき遊びを工夫して楽しむ子がいる一方で、「入りたいけど怖そう」「怖そうだけどやってみよう」という思いをもち、戸惑う子どもの姿も見られた。子どもの葛藤する姿を保育者が理解し寄り添いつつ、機会を捉えて折り合えるきっかけをつくったことで、遊びに参加することができ、「こうしてみよう」「怖そうだけどやってみたら楽しかった」と葛藤を乗り越え、やってみる姿が見られた。また、子ども同士で対話する中で、相手の気持ちを想像し、怖さを加減するなど、遊びを調整し工夫する姿にもつながっていった。

場面によって子どもは様々な葛藤を体験している。今回は、そこを見逃さず、共感的・肯定的に寄り添いながら関わったことが、子どもの安心感につながり、主体性を引き出していくことができたと感じた。

【実践例についてのコメント】

年長児なりに工夫したのに、まさかの「全然怖くない」という年下児の反応で『明日はもっと怖くしよう』と展開されたおばけやしきごっこ。「怖いけど、見てみたい」のように、遊びには一見『矛盾』するような二重構造があります。「怖いけど、見てみたい」という感情の揺れ動きがあるからこそ面白く、息をのむほどの怖さを探求した結果、「やってみたら楽しかった」と、つぶやきから夢中で没頭した遊びの充実が見取れます。

園という保障された空間と子ども達の生活の中で、『遊びの世界』だからこそ、思い切って想像と現実の世界を行き交うことが可能になります。

『自由とルール』『したいけど、できない』『頑張りたいけど、頑張れない』『悔しいけど、楽しい』などは私達の生活で常に出会う二重性の世界です。葛藤を受け止め折り合いをつけようとする心もち、また自分たちの怖くしたいという思いだけでなく、他の子ども達に想いを馳せて怖さを調整し工夫する心もち、よりよい世界を構築しようとする姿です。

さらに、これらの学びに振り返りが入ることで、年長児後半の時期を踏まえた遊びの価値の共有と更なる意欲が引き出されています。

【坂田先生より】

